

『仏教文学の古典』全二巻の主な目次

〔上 巻〕

- 1 日本靈異記（春日和男）
- 2 往生要集（石田瑞鷹）
- 3 枕草子と源氏物語（稲賀敬二）
- 4 今昔物語集と往生伝（三木紀人）
- 5 梁塵秘抄と山家集（秦恒平）

〔下 巻〕

- 1 方丈記（三木紀人）
- 2 仏教説話集（三木紀人）
- 3 徒然草と一言芳談（久保田淳）
- 4 平家物語（上田三四二）
- 5 能と狂言（増田正造）
- 6 一休と正三の仮名法語（水上勉）
- 7 和讃の世界（水上勉）
- 8 良寛の詩集（紀野二義）



有斐閣新書

文学の古典
(下)

義・三木紀人編

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

● 編者紹介 ●

紀野一義

1922年、山口県に生まれる。1948年、東京大学文学部印度哲学科卒業。現在、宝仙学園短期大学教授。真如会主宰。著書に、『禅く現代に生きるもの』（NHKブックス）、『現代に生きる仏教』全3巻（筑摩書房）、『仏のこころ詩の心』（講談社）、『法華経の風光』全5巻（水書房）ほか多数がある。

三木紀人

1935年、兵庫県に生まれる。1966年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。現在、お茶の水女子大学助教授。著書に、『雑談集』（三弥井書店）、『方丈記 発心集』（新潮古典集成）、『徒然草全訳注』（講談社学術文庫）ほか多数がある。



有斐閣新書

仏教文学の古典（下）

1980年3月10日 初版第1刷印刷
1980年3月20日 初版第1刷発行 ©

編 者 紀 野 一 義
三 木 紀 人
発 行 者 江 草 忠 允

発行所 株式会社 有 斐 閣

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 (03) 264-1311 振替 東京 6-370
京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

共立社印刷・和田製本

★定価はカバーに表示してあります

目次

1 方丈記……………三木紀人 1

1 長明の遁世とその前後 2

2 『方丈記』の序章 8

3 『方丈記』本編の世界 13

4 『方丈記』の結末 21

2 仏教説話集……………三木紀人 25

1 『宝物集』 26

2 『発心集』 29

3 『閑居友』 34

4 『撰集抄』 38

5	『沙石集』と『雑談集』	42
---	-------------	----

3	徒然草と一言芳談	久保田 淳
		49

1	『徒然草』における『一言芳談』の受容	50
2	兼好における無常の認識	56
3	遁世者にとっての「境界」	63
4	兼好を通して見た法師たち	68

4	平家物語	上田三四二
		77

1	盛者清盛	78
2	天性不思議の人、重盛	83
3	弱者維盛	88
4	大原の建礼門院	95

5	能と狂言	増田正造
		101

1	能と宗教	102
---	------	-----

2	能の描く仏教世界	108
3	狂言の場合	122

6	一休と正三の仮名法語	水上勉	129
---	------------	-----	-----

1	一休の仮名法語	131
2	正三の仮名法語	141

7	和讃の世界	水上勉	157
---	-------	-----	-----

1	白隠の和讃	158
2	親鸞の和讃	170

8	良寛詩集	紀野一義	185
---	------	------	-----

1	突っ張り	186
2	浮き草	192
3	等閑	197

目 次

参考文献	4
涙流れてやまず	204
.....	
	215

● 執筆者紹介（執筆順） _____

三 木 紀 人（みき すみと）

お茶の水女子大学助教授

久 保 田 淳（くぼた じゅん）

東京大学助教授

上 田 三 四 二（うえだ みよじ）

歌人・文芸評論家

増 田 正 造（ますだ しょうぞう）

武蔵野女子大学教授

水 上 勉（みなかみ つとむ）

作 家

紀 野 一 義（きの かずよし）

宝仙学園短期大学教授

1
方丈記



明長鴨

1 長明の遁世とその前後

●五十の転身

『方丈記』は「無常感の文学」などと呼ばれ、中世の仏教思想の代表的表現の一つとして評価される。自然、その作者の鴨長明は、いわば哲人的風貌で思い描かれることが多い。早くから道心にめざめ、世の条理と不条理とを冷徹な目で見つづけた人物というのが、『方丈記』一編から浮かび上がる作者の像であろう。しかし、現実の長明は、それとは似ても似つかない。少なくとも、人生の大部分についてはそのように言わざるをえないのである。

彼の出家はかなり遅い。二十三歳で世を捨てた西行、三十歳ころには沙弥となっていた兼好などを引き合いに出すまでもなく、「五十^{いそぢ}の春を迎へて、家を出で、世を背」(『方丈記』)いた長明の転身は、人生の時限が五十とされていたころであることを思えば、その遅さは余りにも明瞭であろう。無論、一般的には、遅いには遅いなる理由がある。上巻で触れた『池亭記』の作者慶滋保胤も晩年によりやく出家することになった一例だが、彼には子女の前途に対する懸念が出家の障害になっていたようである。『続本朝往生伝』は、その辺の事情について次のように伝えている。

(保胤は)少年の時より、心に極樂を^{ねが}樂へり。子息の冠^{くわん}笄^{けい}(成人式)纔^{わづか}に畢^{をは}るに及びて、寛

1 長明の遁世とその前後

和二年、遂にもて道に入れり（法名は寂心）。

長明は早く妻子と離別し、三十代以降は独身である。幸か不幸か、彼には保胤が負った制約がなかった。しかし、その身の自由をばねとして「道に入る」意思、あるいは衝動を彼はあまり持っていなかったと思われる。彼の転身の動機は、外からやってきた、いわば事故に求められるようである。『十訓抄』にそのことの簡潔な要約が記されている。

ちかごろ、賀茂社の氏人にて、菊大夫長明といふ者ありけり。管絃の道、人に知られたりけり。社のつかさを望みけるが、叶はざりければ、世を怨みて出家して後、同じく、先立ちて世を背ける人のもとへ、いひやりける。

いづくより人は入りけん真葛原秋風吹
きし道よりぞ来し

これは、長明の死の四十年後に成立した書物が伝える説話だが、他の伝記資料に照らして、あやしげなところは皆無である。

はなはだ明快な記述であるが、特に、右の歌は出家前後の長明の心情をよく映し出しているようである。どこから、あなたはこの真葛原にやって来たのですか。恨みの心で胸が一杯にな



閑居生活の長明（『扶桑隠逸伝』より）

って、秋風を背に受けつつ、ここに分け入って参ったのです。——大意は以上のようなことであらう。ある年（元久元年か）の秋、都を去って、遁世者の庵が点在する幽邃な地に入って行く長明のうちひしがれた姿が再現するような歌である。ちなみに、風の中の葛は、風圧により葉がひるがえり、裏を見せることから「うらみ（恨）」に言い掛けて詠みこまれる。恋歌によく出る表現で、多くは女の怨情をいうのに用いられる。長明を出家させるにいたった彼の激情には何やら尋常一様ではないものがひそんでいるらしい。

● 初期の体験

事実、長明のこの時の「恨み」には、その前提としての長い歴史がある。

彼が生まれたのは、久寿二（一一五五）年と推定される。翌年におこる保元の乱をもって中世の開幕とする見方に従うなら、彼は古代の最末期に生まれたひとりということになる。父は鴨長継、下鴨神社を統轄する正禰宜惣官（しょうねぎ）の身であったが、まだ十七歳の若さであった。長明は、神官としての栄位を若くしてきわめたこの父のもとで、誇りと希望に満ちた幼少年時代を送ったはずである。七歳の時には、生家と深い縁を持っていたとおぼしき中宮高松院の叙爵によって従五位下に叙せられた。

こうして始まった人生は、十代の終わりに突然暗転する。父が急死したからである。長継の後継者には、またいとこの祐季（すけすけ）が任じられ、長明らは一転して傍流の地位に追いやられた。

そのころの長明の失意は和歌の中に悲痛に示されている。たとえば、

住みわびぬいざさは越えん死出の山さとだに親の跡を踏むべく

などという、穏やかなりぬ一首があり、時には自殺を思うことさえあったらしい。

父の死の数年後には、希望の拠り所であった高松院も三十六歳の若きで没し、いよいよ長明の前途は暗くなるが、長明はひところの衝動にもかかわらず、生きながらえていく。その失意を少なからず慰めるものとして、彼には芸術家としての情熱と天分とがあったからである。特に、和歌と琵琶について彼は生きがいを見いだしたが、その彼を伸ばすことに手を貸す人が何人もいたらしい。

長明に和歌の手ほどきをしたのは、しょうみょう勝命しゅんめいら父の旧友たちと思われるが、長明が正式に「師弟の契り」(『無名抄』)を結んだ相手は俊恵しゅんえ法師である。彼は洛東白河の自坊を開放し、これを「歌林苑」と称して歌人の集会の場にあてていた。そこには主として在野の歌人が集まって月例の会を持つ習慣が四半世紀続いたが、長明はそこに参加した最後の世代にあたる。まもなく俊恵は死に、長明が彼と師弟でありえたのは短期間であつたらしいが、歌林苑で長明の得たものが小さくなかったことは、晩年の『無名抄』によって明らかである。

長明には、もうひとり、中原有安ありやすという重要な師がいた。彼は歌人でもあつたが、音楽万般にわたる名手として知られ、晩年には、弟子にあたる摂政関白九条兼実の推輓すいばんによって楽所あそかり預に任じられた。長明は彼から琵琶を学び、三秘曲の一つである揚真操ようしんそうを伝授されるにいたった

が、他の二曲を習ういとまもなく、有安に先立たれた。長明四十代はじめのことである。

● 遁世への経緯

長明は、父の死からそのころまでの二十数年間、私撰集『月詣集』（二十八歳時）に四首、勅撰集『千載集』（三十四歳時）に一首その作が採られ、それに先立って家集一卷を編み、歌合・歌会などにも再三列席し、歌人として無名ではなかったが、一時期を代表するほどの作者ではありえなかった。その彼が、歌人として意欲と能力とにめざめつつあった若き上皇後鳥羽院に見いだされることによって、一躍歌壇の中心に登場することになる。後に新古今時代と呼ばれる正治二（二〇〇）年以後の数年間、四十代後半を送りつつあった長明は歌人として存分に活躍し、特に再興された和歌所の寄人の職を得てからは、存分にその仕事にうちこんだ。

たまたまそのころ、下鴨神社の撰社の河合社の禰宜が欠員となり、その後任人事が日程にのぼり、長明が有力候補として噂された。後鳥羽院は、長明の忠勤への恩賞という意味合いからそれに同意を示した。かつて、長明の父がその地位をへて下鴨神社の惣官になったことからすれば、長明にとってその人事は、「親の跡」を踏むことになる好機会である。二十数年来はたせなかった宿願を実現するのが目前となって、長明は感涙にむせんだが、結局、彼は河合社の禰宜になることができなかった。下鴨神社の惣官として今を時めく鴨祐兼がその子祐頼を強く推したためである。長明はこの対立候補に比べ、社への貢献においても官位（祐頼は従五位上、

1 長明の遁世とその前後

長明は幼時以来従五位下のままであった）においても劣り、あるものは、熱意と院の好意だけであつた。

後鳥羽院は、敗北した長明をあわれみ、別の小社を官社に昇格させ、彼をその禰宜にしようとしたが、長明はこの破格な代案を拒否し、失踪した。前記の「いづくより」の歌はこの時のものである。和歌所の開闢^{かひく}として、『新古今集』編纂の事務を担当していた源家長は、同じみなしごのよしみも手伝つてか、ひとときわ長明に対して同情的な人であつたが、さすがに長明の非常識な言動をいぶかり、日記の中に、この事件の一部始終を回想している。

長明は、第三者の想像を絶するような深い怨恨をかかえて都を去り、その激情を媒介として出家し、大いなるものにめざめて『方丈記』や仏教説話集『発心集』の作者になる。その彼に生きた教材を見る『十訓抄』の作者は、前記引用文につづけて次の文章をしたため、共感を惜しまなかつた。

深き怨みの心の闇に、しばしの迷ひなりけんと、この思ひをしるべにて、まことの道に入りけるこそ。生死^{しうじ}、涅槃と心同じく、煩惱・菩提ひとつなりけることわり（生と死をくりかえし、迷ひにとらわれることを離れずして永遠絶対の境地はありえないという道理。『往生要集』大文四の「生死即涅槃、煩惱即菩提」による）、たがはざりけりとこそおぼゆれ。（後略）

この記述はそれなりに正当であるが、後世のものであるだけに、やや事柄を整理しすぎているといえまい。源家長のように、なまみの長明を親しく見た人にとっては、次のような

ものであった。

その後、思ひがけず対面して侍りしに、それがとも見えぬほどに瘦せ衰へて、「世をうらめしと思ひ侍らざらましかば、憂き世の闇は晴るけず侍りなまし。これこそ、まことの朝恩にて侍るかな」と申して、昔の袂も、よよとしはれ侍りし（『源家長日記』）。

恨みを持つことによって迷いの世界から脱出する端緒をつかむこととなったことをのべ、そのきっかけに「まことの（人事をめぐるご厚意などとは本質的に異なる真実の、というニュアンスである）朝恩」を感じている長明にはたしかに浄化・再生した姿が感じられるが、なおここに描かれる愁嘆ぶりには世にあったころの長明の情念が感じられないでもないのである。

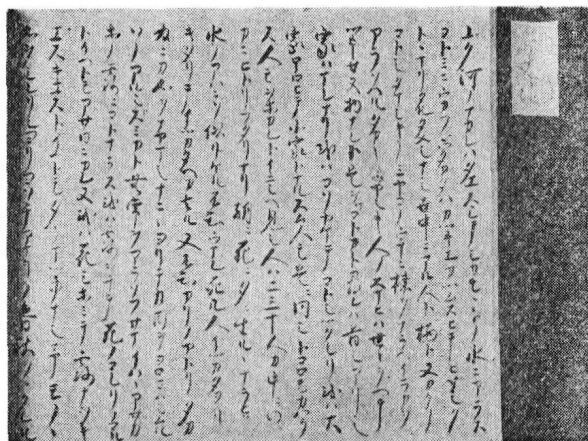
長明は失踪後しばらくして洛北大原に入り、五年後に日野に転住、さらに三年余たって『方丈記』を書くが、この作品も、淡々とした筆致、古典的抑制のきいた文章にもかかわらず、どこを切っても熱い血が流れ出すような感触があるのである。それは、まったく無私の姿勢で書かれているかのような冒頭の文章についても言いうることである。

2 『方丈記』の序章

● 序とその源泉

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ

2 『方丈記』の序章



『方丈記』（大福光寺本）の巻頭部分

消え、かつ結びて、久しくとどまりたる
例なし。世の中にある、人と栖すまと、また、
かくのごとし。

誰でも知っている『方丈記』冒頭の文章である。『方丈記』は、全編約一万字の作品だが、その中に盛られる記事は多岐にわたり、さまざまな問題が交錯・葛藤しており、序に当たると右の文章の意義はそれほど重くないという見方もある。それに、ここに示されているのは、多少とも物事を深く考えたことのある人にとっては自明のことにすぎない。特に、乱世における深刻な体験をへた中世人にとって、万物の流転、世の無常などは言い古された指摘で、同じ趣旨をのべた書物はむしろ多すぎる観さえあったはずである。しかし、それらのほとんどが忘れられたのに対し、この『方丈記』の名文は『平家物語』の序曲など